

## TRIJYA HY-Special

純正ストックにしてハイエンド、  
CVOで望んださらなる高み

文=黒川鏡仁 text by TED KUROKAWA  
写真=渡辺まこと photographs by MAKOTO WATANABE  
取材協力=トライジャ  
phone 072-970-3110 <http://trijya.com>



そもそもカスタム感の高いCVOブラックアウト。ストックでも36.5度という広いネック角に、5度レイクのツリーを組んでシルエットを造っている。

かつてミレニアムを迎える直前、1997年よりH-DがFXR IIより開始した、純正ファクトリーによるスペシャル・シリーズCVO (Custom Vehicle Operation) は通常のラインナップ以上に排気量を大型化し、ハイスペックにしてハイグレード、まさに豪華絢爛な仕様となっている。

その中でも最初からソフトイル系のCVOとして登場したFXSBRSEブレイクアウトは、他のソフトイル系の排気量96cuin (1584cc) に対し、110cuin (1801cc)、車体もロッカー譲りの36.5度の広いレイク角を持ち、リアには240ものワイドタイヤと、文字通りの特殊仕様となっている。

そして、ここで紹介している大阪のトライジャが手を加えた2013年式のブレイクアウトは、そのスペシャルモデルをよりハイエンドへとグレードアップしたもの。主だっは純正の外装パーツに二次加工を施し、造形を変えてリペイント。各部のカバーや補機類を刻美のビレットに変え、マフラーをバッサニーへと変更。特別にフレームやエンジンに手を加えたわけではないが、ご覧の通りに、見事、よりカスタム感ある、個性的なマシンへと仕上げられている。



## MOTO GARAGE LIFE NARROW CRUISER

『走り』と『スタイル』を  
バランスさせたチョッパー

文=及川壯一 text by SOUICHI OIKAWA  
写真=渡辺まこと photographs by MAKOTO WATANABE  
取材協力=モトガレージライフ  
phone 073-452-6855 <https://www.motogaragelife.com/>



流れるようなラインとは、まさにこのソフトイルのことを言うのだろう。フロント18インチ、リア16インチのホイール&タイヤのバランスも絶妙だ。

あえて派手な仕掛けや意表を突いたカスタムは施さず、3コードのブルースやR&Rのごとく極めてシンプルにモディファイされたソフトイルFXSTC。フレームやサスペンションなどの骨格には大きなモディファイを加えず、バイク本来の旨味を損なわない徹底した作り込みで、シンプルながらも独特の端正なスタイルを追求している。

そのディテールを見るほどにモトガレージライフのビルダー釘崎 仁特有の味付けが見て取れる。フューエルタンクからシート、そしてリアフェンダーへと繋がるラインはご覧の通り、流れるような均整の取れたバランス感覚にプロショップとしてのセンスとテクニックを見て取ることができる。これはソフトイル・フレームのラインに合わせてワンオフ製作したフューエルタンクのデザインによるところが大きく、見る者に軽快なイメージを植え付ける。

さらには、コンパクトな外装とナローフォークの恩恵によって、ソフトイルとは思えないほど軽快なハンドリングをも実現。走りとルックスを兼ね備えた大人の色気すら感じさせるチョッパーに昇華しているのだ。



# Exterior Parts for New Softail From Trija

先のページで紹介したハーレーダビッドソンのニューモデル、ミルウォーキーエイトに対応するパーツ群がトライジャから早速登場。ここではトピックス的にソレラを紹介したい。

文・写真=渡辺まこと 取材協力=トライジャ phone 072-970-3110 www.triija.com

2017年にツアラーモデルが先行して販売され、2018年からは新型ソフトテイルが登場することでH-Dビッグツイン全モデルとなったミルウォーキーエイト。4バルブヘッドが採用されるこの最新H-D用パーツが早速、トライジャから続々とリリースされたことは、本誌の42号で既にお伝えさせて頂いたが今回は、新たにそのメッキバージョンが登場。新時代のソフトテイルのカスタムに新たな選択肢が加わったことをお伝えしたい。

以前にこのパーツについて紹介した際もその優れたフィット感について書かせて頂いた覚えがあるのだが、今回のメッキバージョンも他に漏れず、ご覧のように高い完成度を誇っているのは流石だ。

最新の素材に最先端の技術を注ぎ、早速生み出されたプロダクト……やはり、時代がどう変わろうともソフトテイルというモデルがカスタムの王道であることは変わらない。



本文中でお伝えしたとおり、最新の3Dスキャナーでノーマルを正しく数値化し、開発されたトライジャ・オリジナルパーツの数々は、ノーマルの外装にフィットする、その精度の高さとデザイン性がウリ。各パーツに関する価格や対応車種、詳細については同店までお気軽にお問い合わせを。



※表示価格は税込価格になります。

品名	個	仕上無し	クローム	塗装：黒
		定価	定価	定価
チンスボイラー	個	¥66,960	¥104,760	¥91,800
コイルカバー	個	¥24,840	¥32,400	¥32,400
ヘッドライトカウル	個	¥46,440	¥86,400	¥70,200
タンクチップ	個	¥21,600	¥48,600	¥32,400
フロントフェンダーチップ	個	¥21,600	¥48,600	¥32,400
リアフェンダーチップ	個	¥21,600	¥48,600	¥32,400
サイドカバーチップ	set	¥21,600	¥48,600	¥32,400
タンクストレッチカバー	個	¥19,440	※¥30,240	¥30,240
※フルセット	set	¥244,080	¥448,200	¥354,240

※タンクストレッチカバーの付属品は別売です。

ドラッグバー670mm	個	¥46,440		
球面ミラー-LR	set	¥18,144		
フロントホイールカラー	個	¥7,560		
リアリングキット	set	¥9,720		
ミニLEDウインカー-F	set	¥19,440		
ミニLEDウインカー-R	set	¥19,440		
化粧プレート	set	¥4,860		
シフトリンケージ	個	¥33,960		
ソロシートベシク※	個	¥61,560		
リアフェンダーカバー	個	¥12,960		
※フルセット	set	¥234,084		





## HAMMER SYCLE 1981 FXE

文=及川壯一 text by SOUICHI OIKAWA 写真=渡辺まこと photographs by MAKOTO WATANABE  
取材協力=ハマースイクル phone 029-824-3393 <http://www.hammer-cycle.com/>

あえて派手な仕掛けや意表を突いたカスタムは施さず、ストックの良さを活かして極めてシンプルにモディファイされた1981 FXE。ベース車がほぼストックで、しかもオリジナルペイントだったこともあり、あえて奇を衒わないベーシックなスタイルをチョイスした。ショベルヘッドも最終型となる'84年からすでに30年以上が経過しているだけに、純正パーツやオリジナルペイントなどは継承していくべきものになったといえる。それだけに闇雲に手を加えるカスタムで

はなく、ベース車の純正度が高い場合はオリジナルを尊重するモディファイも視野に含めていくべきだろう。

このFXEもハンドル、シート、マフラーなど直球とも言えるマイルドなカスタムに留めており、カスタムである前にオートバイである、という抑制の効いたクリエイションが際立つもの。『やり過ぎない』というさじ加減もまたハマースイクル濱田康司のカスタムマナーだろう。ゆえにH-Dショベルの純粹たる魅力がこの一台に息づいているのは間違いない。



①ハンドルバーは、ハマースイクルのNarrow-high。タンクはオリジナルペイントのFXE 純正。②マフラーはドラッグパイプで、ストックの外装とフレームにもベストマッチする定番中の定番。ローダウンサスによって精悍なフォルムを獲得した。③シートはドラッグオン製で、シッシーバーはH-D純正。シンプルな構成だ。

FXEオリジナルの外装と4スピード・フレームを活かしたマイルドカスタム。



①すべてがワンオフのテールエンド。サイドバッグの脇からマフラーを取り回すなど、ラグジュアリーな中に攻撃的なイメージが醸し出されている。②クロームの輝きとビレットの質感、ソリッドかつゴージャスなディテールだ。③エンジンは2009年のTC96。エアクリナーはネス、マフラーはトライジャによるワンオフ品。

古代ローマ時代の戦車をイメージとして製作。シンプルだが存在感の有るバガーだ。

チャールトン・ヘストン主演の映画“ベン・ハー”。その劇中に登場するコロシウムでの戦車でのレース場面は映画史に於ける不朽の名場面とも云われる。力強く、荒々しく、そしてシンプルながらも豪華なイメージは、こと欧米圏ではクルマ、バイクを問わずにカスタムのイメージリーダーに捉えられやすいものでもある……。

ここに紹介しているトライジャの2009年式FLHXSEをベースにしたバガーもそうした例の一つであり、先頭に馬を

四頭並べたボリュームある姿を幅広のフェアリングと26"もの大径ホイールと、GRAMASなフューエルタンクに。そして、テールエンドのバッグ、フェンダーを洗車のコックピットへとなぞらえたかのようにも思える。

単にバガー用で設えたパーツを組むに留まらず、明確なモチーフ、ビジョンを持って創られたカスタムだけが持つ、一本、芯の通ったまとまりを見せるその姿。そこにカスタムに於けるコンセプトの重要性を改めて感じるのだ。

文=黒川鏡仁 text by TED KUROKAWA 写真=渡辺まこと photographs by MAKOTO WATANABE  
取材協力=トライジャ phone 072-970-3110 <http://trijya.com>

## TRIJYA The Chariot

